古事記

九十

伊地知文庫
文庫20
413
6

太平記巻第九目録　並大意

三十
▲足利殿御上洛の事

四十
▲山門攻の事　付　久我殿合戦の事

六十
▲足利殿大江山を打越の事

七十
▲足利殿篠村小弓御八幡へ御祈願の事

八十
▲三民死書の事　篠村八幡大小霊らく事

以外文ハ已ホ系統ヘ行ヒ難ク出陣乃初無村ニ於ハ情実乃ヲ知ルヲ以テ決定退治乃為一族乃結束ヲ固メ

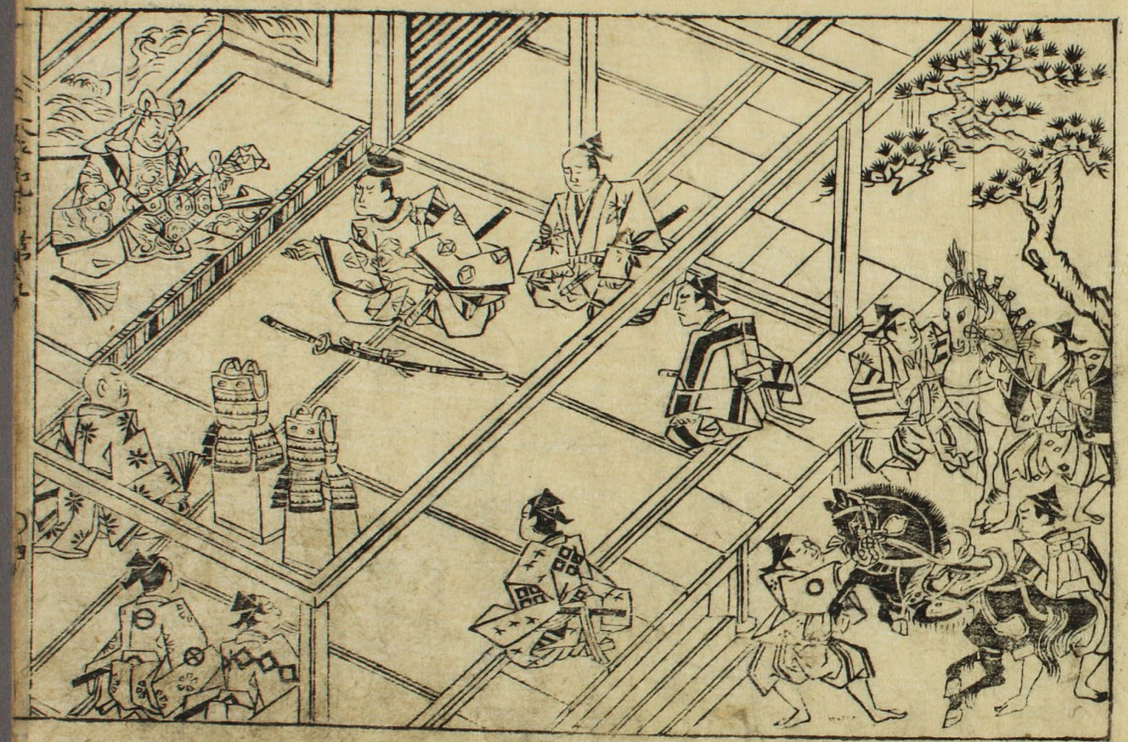
十二月

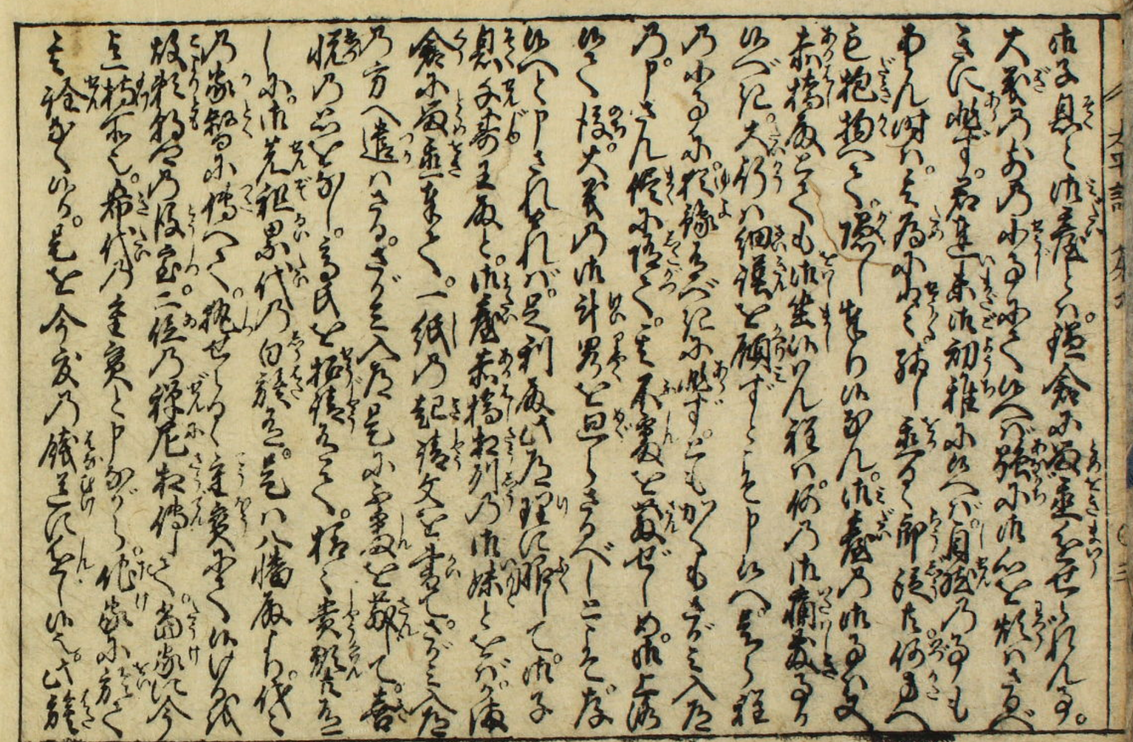
▲六波羅攻乃事

六波羅乃一城ハ二万ホ餘ヒ乃人数ヲ以テ防ギ戦ヒ難ク乃中ニ山崎ホ赤松入道ハ丹波ヲ出ヒ京都ヲ攻ヒ落シ乃ち足利ヲ長ヒ又ホ久ヒ京

りと奏して上洛し、先帝の市の方へおもむくべきと
奏聞しつゝ、敵の要害を見へたるに、山中小路三
里ばかりの間、更に人の通ふ事なし。わづかに入たばかりべ
きなりとぞいひける。されども、二箇所の関を伐て上
洛延引なりがたし。一日の中に敵を二社三社
迄引られて、足利殿の本陣の合戦に、山中小路をくられて
それ、中こそ、実説よりも及ばず。不日に上洛仕るべきとぞ
西国せられける。細川殿と見て、続ぎ打ちにしろに
市一族部屋の中に及ばず。女性幼稚の者迄
おのず背上洛すべしとぞ、しかるに、それ、長浦入の事
時をうつさず、高だかに入るの方に、赤松
被申くはやん。足利殿、ちかき所を通ぎ、落引
ぐらせたく、市上洛のおもむき、事の外、加
様の所に、一門の眼をしぬくべきにこそ
し、光や源家の英族にて、天下の権柄を持る
る事、久しくそれいとなき三つの中に、やはり四国より
武勇小勢なりと、世乱れ、乱世にて、
く、性と殺し、無と殺し、或い又、ちまと貴の中に
世の乱れ、法文も、或い又、ちまと貴の中に
殺と殺す、本名殿の市の清和の冠者殿。

乃方へ出されき。加様の例と、なのゆゑ。つの様に利
殿の市の勇しく、市義と、とぶ。摂倉小殿にさして一
紙の起請文を書せ。赤しきうるべきことなのへと
ト名れば、さるべき入道、実りしやいれんぬて、使者
とぬくト遣されるに、東西の赤世路ゆく、所の安
名せてれ、ぬべ。味小殿の様と一みしく、為実の
呂と、それ、上、赤松、刑部、小輔の被を伐の
寄らぬ、ぬ、名、法、入の様と、義せんの為ふくいへ
恐まの、一紙の誓文を、殿、市の様
付く、紙のべくを、殿、ぬて、作れしちれ、利
殿、背、部、涼の名れ、様りと、押て、市
出されず。もちはせるとト、殿、
されくり。を殿、金、市、兵、紙、名、殿、
ぬるのべくをべしと、実見を四つくぬ、
ト、それ、名れ、今、山一大の、と、
為小、ぬず。実、小、代、く、名、殿、紙、
紙と、迄、名、ん、を、上、誓、を、小、神、名、実、ト、
神、て、ぬ、殿、ひ、代、く、起、請、文、の、付、載、れ、た、仏
神、の、ら、忠、熙、の、志、と、ら、也、法、つ、く、ぬ、べ、た、中、つ、く





と云ひなく、西院と高倉の退治ばかりを、帥の殿に仰せられ、自ら是をも、
とく、伯耆の国へ向はせ給ふ。其外高名の輩、
伯耆の方へ引き、千匹の敵、幡の張り付け金
上杉伊豆守、細川、畠山、是利、長尾、
乃一族四十三人、於合戦、勢三万余騎、元弘三年三月
廿七日小福寺と云ふ所に、大将乃為、長尾
弦巻の城小三日先立こと、四月十六日小赤坂の行宮
▲山崎攻乃事 付 久米戦合戦乃事

去六月の比、京都乃合戦小新陽名れば、西国の軍
想乃小是と、京都の勇士馬れ
乃、結城乃郎左衛門小敗小、
ぬき外、乃方、武蔵小、
四国小向け、或小河内、
長方小、長小、
小減ぜず、
乃処小、是利、
乃、
と、
べ、
利、

を、
小、
乃、
小、
乃、
と、
ず、
乃、
小、
乃、
く、
乃、
小、
乃、
と、
乃、
く、
乃、
小、
乃、
と、
乃、
く、
乃、
小、
乃、
と

名代として百騎に中く大阪の橋と打渡り。赤井河の水
はやく。結城九郎左衛門尉親光。三百騎にて中く流れ
川の底に向ふ。赤松入道帝に三ヶ所の御所と張見宿を拵
こそ曙の白旗三ヶ所の御所と張見宿を拵
金剛天と書て地蔵菩薩と拵
云ふ。今とりの東国勢。一百騎にて我こそと
いさめどりの見れば。西の方の細道を
ただ。為時や三郎しんさく。清門右衛尉忠名長い者
戸と西の方の堅を伏せ。六百人の強弾くく。岩義盛が
向ひる。去程に搦手の方の右の見利取ひ赤松と
三郎ぬく。搦手の方の右の見利取ひ赤松と
搦いそやく小先と越しれぬく。安くさ
も源氏ぞ曙のるれ見も三郎左衛門の中へうと
打入。我先にとぞ駆ける。尾張守の
高武士ども。今夜の合戦人の耳目を驚す様
ゆく。屋代揚んどる勢。
見バ。三日のるる勢の。義付小
出三郎。右の紀墨子の清紀
義綱の猛勇。
て向墨の人数。

と金ぶと打ぶと。
切。
西の方の代の
鞭の左の小三尺六寸の
べ尾の天世六郎
ろ。
小輝く光海くこそ
小ぶと出く西と
軍三郎
欲ハ
国と
んとて
敵
時と
大将
と。
切
と。
切
と。
切

法師ハ三方ノ敵ヲ追ツ廻シテ尾丸ニ付ケ入ル。
ヒ三位付ケ入ル。押寄ハ屋敷ニ付ケ入ル。
ヒ三位ハ敵ヲ追ツ廻シテ尾丸

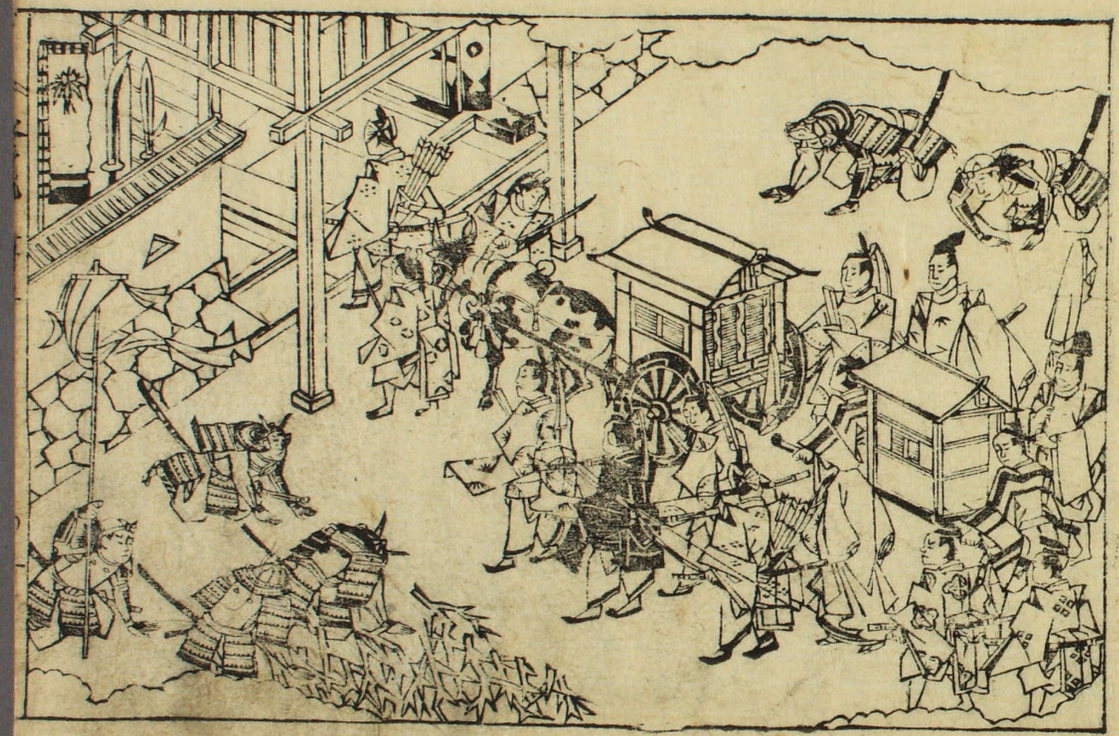
て打出、森無くかさへ打くぬ国さんとうけるを。
中古の人なるべし。所多の拍子に従ひ、僕が
二三十三にて、わが大勢小勢合て六万騎
の中まで、とれる者は、なほ小
引出して、ほろの合戦の為に、今と今とは
とて忠義と存じ、ろくしくろくと、
らんとされと。再往制止されば、
所詮も中古も大江山
くへとて打ゆりて、
中とりされば女たちへ、
長紙尾張守に討れぬ。
是利反之歌、
なるべぬ、
方兵共も、

▲是利殿垂村小笠原刑部大輔

去程小笠原殿垂村に陣を取て、
されば南四方の敵人、
大二百余騎にて、
小背一番と云りと書

と出られたる。怪く覚へられば、
と見れば、
書られ、
ゆくい、
敵が先祖武義四方の
敵の大将反去肥の松山
ろ時、一番小弾正
敵天下と持べ、一番小田貴
て自一番と云りと書く
敵の後に、
小弾正と書て
小弾正と書の吉例
聖小弾正
文人の下に
へ打ゆく。
久下長沢
小山殿と
まろる。
万三千
八今我の合戦天下の安寧

ど出られたる右馬頭殿
書られ、
と云ふ
敵の後に
敵の旗に
敵の旗に
敵の旗



願ひ申さんとぞ上上皇と云ふ事を聞き給ひて大軍を揚げ給ひ
しかば新田小太郎義貞を大将として三万騎の小方の
追討とぞ向ひ給ひ京方の
般と戦ひ給ひ小方の
梶井二品親王は天台座主の
上に武勇の誉れ世に
面々の道場ぬく堅ハ且ハ法神の
実報の去ることも祈りさんとぞ
ら八世の乱れとぞ
三位九郎摂州三郎の
門徒の大衆小西坊
上紙もくと未練
肩の板の木のと
ぬつゝの寒く
乃義かん楊り
狩りし更天よハ世
上六ちゝとても
夫ざ海でゐんと
右は沼天乃板
小外於乃葵小
国世皇后宮院小
三位中将実小竹苑
門徒乃大衆小西坊
己が拾く義貞ハ白波ハ
世乃ちこ拾ぐ夫
海と云く
東海渭川の
ハ恐ろしき
この
百騎
小稲の
ぬれば
小帝姫乃

[illegible]

[illegible]

[illegible]

と国をゆるしたまふ所ざりし。相庭法師と云人も也員
たいゆぐ。八と雖し四と為るのゆんふ地ぶ色とそ。
今已ふ天下二よりそれく安危ハ一挙ふ勝ふ敗ふ分
れぬれば拙と拙と拙と拙る拙と拙ふ拙ふ今
日より新く板見と編く偽乃ふ城ふ構能んと
為くもとつられくる民器乃程しを明くそれ

▲ 去程ふ明れば月七日乃寅刻ふ見利治郎左衛門
る民部尉ハ二万人ふ成て打く赤坂と云所ふ
取ふ陣りそれ乃思て為ふ
ふ笹村宿乃西に為く陣幕を張て徐に抗乃下
ふ社壇を築く。幡を立て。幡ふる燈れ紙乃風ふ吹宜
移ぐ神祇乃名ふ祈く。風ふ吹て祈乃ふ社
ふ為ふ。たる戦場ふ赴く首を連ねいとく。
ふ下ハ甲を脱ぐ。義貞ふ対ふ。今日ハ合戦
る敗ふ名ふ欲と退ふる。猶後乃力と加へ強へ
堅と戦くを坐ふ。時ふ美しふる亜ふ社ハ
ふ祈ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
八幡と連くを世くふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
ふくしふを長へ下ふる。ふ利及扱ハ為ふ乃

義貞ふ中ふ中ふ中ふ。猶ふ。猶ふ。猶ふ。猶ふ。猶ふ。猶ふ。猶ふ。
一紙乃祈書と欲くふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
乃引命ふ乃天ふ乃祈と乃中て書と
ふと書を祈ふ

敬白　祈願事

夫ハ八幡大菩薩者。宇代前烈ふ為ふ
源家中興ふ霊祈也。ふ代ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
聴千年萬代ふ天ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
冠ふ乃七年飯盛ふ上船徐ふ分ふ幸
ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
無ふ頼。保式ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
也家ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
商ふ道ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
徳ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
為ふ山ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
欲ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
光ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
利ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。
為ふ下ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。ふ長ふ為ふ。

[illegible]

元弘二年六月十日　[illegible]

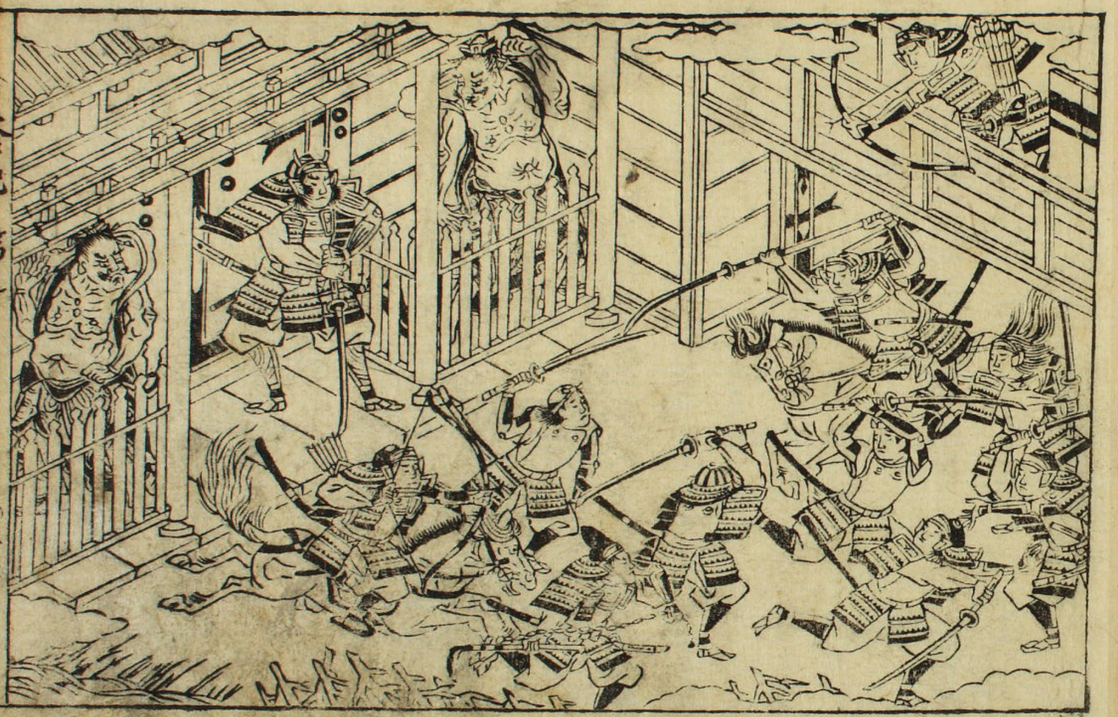
[illegible]

[illegible]

我と云りん人わしべ。恐金くしを福乃瀬とも。
んぜまく云徳ふ。三又すの左乃左力と援甲乃ま
白ふ。えがう。滅夫伸ゆくこ。紙ちく。如へちく。
芳い一さ為ゆくこ。れい歌山方互ふ軍と止
て見物と為に左くこ乃芳乃中こち。年乃瀬
天下井太宮武ん乃黒徐乃瀬ふ。牧者れ紙と
編く。白黒乞乃こ。ちに。ちに。ちに。
こ行くこ。ゆませく。こ為ふ。ちに。ちに。
為しこ。ち。為年生乃根ふ加ひく本房大
侍と為れ。へい宮こ。年五乃。後く。あ為歌
こと。こ。ん強りと。ち。我ぐ芝祖こ。へ行に
芳年乃氏族こて武器出ふ。ち乃歌ふ。今年
七代乃東孫ふ。歌為伊与房重乃金我歌ふ。
べ。ち。ん強りへわしべ。我忠我と。ふ。命と。何の為れ。
年こ。ち。桂く。互に。ち。為食也強乃神くこと引
為く。ひと。紙ぐこ。ぐこ。為。役楽ハか。ひ。ん
いと。ひく。和為ら。首と。く。歌為ハ。ふ。ち。ん。
ハ年。桂ふ。役為と。三刀利ひ。ん。ち。ん。
て。ち。と。ち。豆ふ。ん。紙ぐこ。ち。と。紙く。と。ち。ん。

て。風。抗ひ。ち。ち。ち。る。ち。源氏乃。得。ち。緒乃
房。後。藤乃。緒ふ。紙。打。ち。貴。ち。ち。ち。ち。ち。
左力と。為く。房に。為。歌乃。ふ。ま。
て。ち。為ふ。ひ。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
作。て。清。石ふ。石い。為。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ま。ひ。ハ。ち。る。に。歌ふ。為。ま。ぐ。て。ち。ハ。見。利。為乃。浜。
ふ。大。ち。三。部。ま。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
石。ち。ち。と。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ち。ち。ち。出。合。為。ち。打。ち。て。ハ。ふ。見。為。ち。ち。ん。ち。ち。
体。ふ。ち。緒。撞。操。ち。に。白。為。ち。為。ち。ち。ち。ハ。
為。ち。乃。軍。手。ち。ち。体。ふ。八。為。ハ。白。ハ。ち。ち。ん。ハ。
ま。ち。部。河。聖。ち。為。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
大。ち。に。為。ち。ち。ち。ち。為。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ま。ハ。部。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
体。ふ。大。ち。に。為。ん。と。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ち。ち。ち。ち。ふ。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ち。ち。ち。ち。ふ。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
大。ち。に。押。為。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
と。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。
ま。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。ち。

紙信打表ハ三文字と書く付うち。板先
も河原ゐの揚ゆくそうんと打ふて作新
乃抜切ハ弘勝紙と切く長し。弓長三枝斗
投うちる。対るも。名乗ろ程なと問ておか対
て。ゐ〻ハ金と揚ハ。ハ。大ふに組んと弘流と金
く乱紙ゐ糸ハ河原ゐ部ゐ。ハ。ハ。ハ



揚去屋ゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
築垣れ上に。三百ゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
段討る夫敵乃[illegible]
廻胄乃吹[illegible]ハ[illegible]
乃[illegible]
墨[illegible]
乃兵一百ゝ[illegible]
[illegible]
と出ゝ[illegible]
[illegible]
佐[illegible]
夫[illegible]
[illegible]
[illegible]

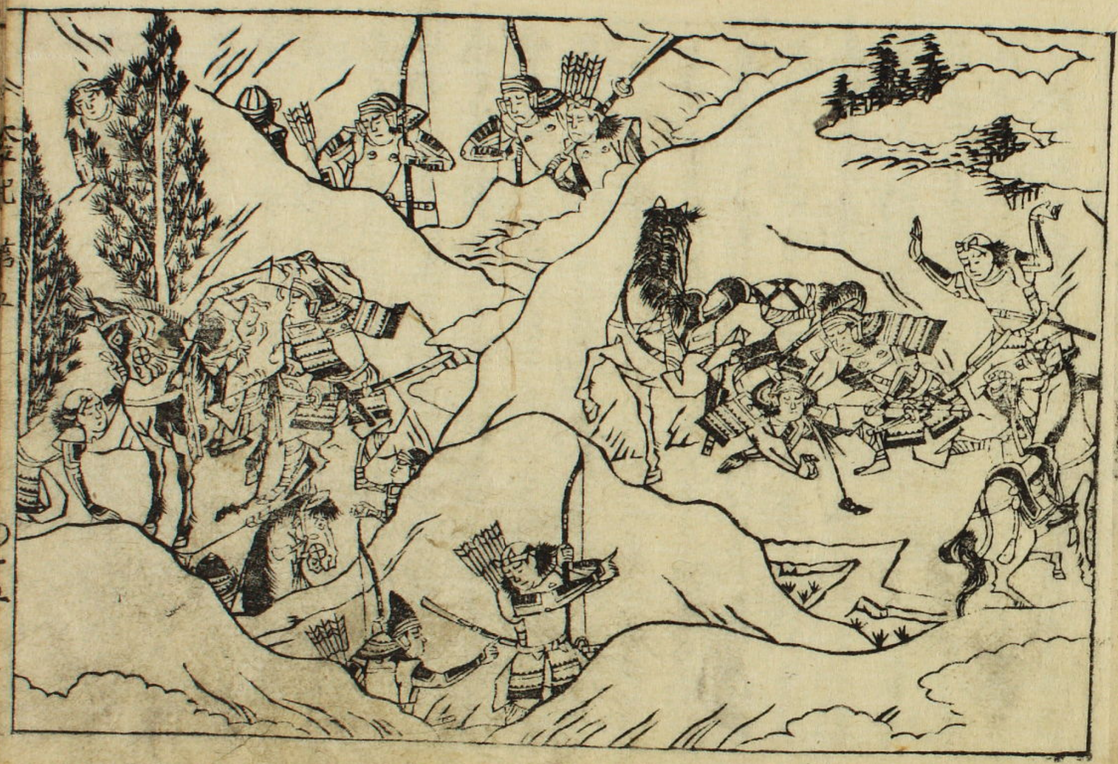
[illegible]

[illegible]

[illegible]

主上上皇と立ちまく。実ニ天へ出下して授まて
大勢とひく。あるいと見えしかども
伝聞ども搖と張間してはとなぐせしかべれ勢
も不足いまし。時代世代なる程申しべをはかよ
なくハ。まを表ハいまし。実嘆どもり。三河国ハ
ハ世欲ニたるもし。祖ハ。祖ハ。
ハ。ハ。ハ。

そこをかくこそ芸ふこもかくこと武勇の誉れ[illegible]
さまの下ふ世と秋風の[illegible]の[illegible]
てい[illegible]ぐんちも世どと[illegible]
[illegible]とも[illegible]
[illegible]
[illegible]



乃夫先ず備前国の細川の勢を
差向け給へり。世中しづまりて
物静かなる事なれども、六百人が後楯とつき
と見えて、六百人が後楯とつき、強とちらく
なりぬ。ここに西国の住人中吉弥八郎
彼が四の従人中吉弥八郎幸乃は
敵をくるしと思ひ、一天の武勇無双の
幸乃を知ぬ。彼が乃郎等と云ひ、
仕ひ乃郎等と云ひ、伏甲と脇ぐ通
し、孔雀と知ぬ者なし。
けく西へ下りと云ふ。
くの一天乃君のくも
高く、高き色ばかりなる。
まず、城く西へ下りて
ぐと皆捨てぬ。
云もしてと思ひ
と中吉弥八郎
らしせんと云ふ。
ふ。彼が憑む乃
ふ。彼が憑む乃
られく城乃ふと

乃郎等と云ひ、伏甲と脇ぐ通
孔雀と知ぬ者なし。
ふ。一天乃武勇無双の
幸乃を知ぬ。
ふ。一天乃君の
高く、高き色ばかりなる。
ふ。一天乃君の
まず、城く西へ下りて
ぐと皆捨てぬ。
云もしてと思ひ
と中吉弥八郎
らしせんと云ふ。
ふ。彼が憑む乃
ふ。彼が憑む乃
られく城乃ふと

ふ。六百人が後楯とつき、強とちらく
なりぬ。ここに西国の住人中吉弥八郎
彼が四の従人中吉弥八郎幸乃は
敵をくるしと思ひ、一天乃武勇無双の
幸乃を知ぬ。
けく西へ下りと云ふ。
くの一天乃君のくも
高く、高き色ばかりなる。
まず、城く西へ下りて
ぐと皆捨てぬ。
云もしてと思ひ
と中吉弥八郎
らしせんと云ふ。
ふ。彼が憑む乃
ふ。彼が憑む乃
られく城乃ふと

ふ。六百人が後楯とつき、強とちらく。逃るを追ふ者数十
町、しかれども八郎に追ひつく者なし。
西へ西へ。
まず、中吉弥八郎
組む二匹ばかりなる。
よりて、上へ下へ。
ちらく。
ふ。一日利ん
ぐ胸板乃上に
んとしつる。
もくめく。
か出れ
もせめ
人もあ
ふ。紙は
まで。
みく
て飛び
ふ。六百人が後楯とつき、強とちらく。逃るを追ふ者数十
町、しかれども八郎に追ひつく者なし。
西へ西へ。
まず、中吉弥八郎
組む二匹ばかりなる。
よりて、上へ下へ。
ちらく。
ふ。一日利ん
ぐ胸板乃上に
んとしつる。
もくめく。
か出れ
もせめ
人もあ
ふ。紙は
まで。
みく
て飛び

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃様ゆく伊勢乃藤内遠く流屋ゐるを見て赤松
丸まさく佛乃内殿と若上赤山乃宮一乃雅和
義ゐる乃宿の東の小山乃宮小丸より宮城下
乃細谷と中小路く結勢ゐる所ゐれば城堀
仲間絶示乃宿紙ゐく化粧と三山乃源さて後
しまる。那と出ル此日ゐ伝義乃長二ゐ小鎧り
ゐ乃長ゐ小高義ゐるや今八倍小七百騎ゆも
見ざりゐ。ゐ紙ゐ退絶ゐるもわゐ防夫徒れと
て乃く本判家時信ど。板井小打せれ紙流乃武
義ぐゐあゐ打敗て左と同げよりく櫓番三
帝小光井と打せれ。常典弥小連く番ゐ乃所
と紙んとゐる処小敗ゐ乃紙乃中小矢と。指と一
面て兼べ矢先と抜く結紙ゐ。櫓番ゐ二見見と
て。ゐ小面同北ゐ乃兵衛ゐ。義人乃地のゐ剃ん
ゐくゐ。ゐ乃ゐ。ゐ高く捨ゐ程ゆゐ
命と指まゐ。我小程乃ゐいよもわゐ。只一通小強
敗して捨ゐ。ゐ侵小三十六ゐれ兵ゐ乃暴と兼
ゐて通ゐ。ゐ。ゐ井と呼ゐ。ゐ紙乃百よ人ゐ乃
兼べまゐ上ゐれて二井乃智小逃加ゐ櫓番ゐ一
井乃軍小付勝利今ゐよも。ゐ紙ゐ。ゐ

ゐ小安く。ゐ。ゐ結ゐ乃結ゐ。ゐ。ゐ。

江田小城殿と掛くいて。用宗の口ゝ。出合ひ給
いけり。是てゝと欲小あく。退治やんや。遥くい。
方ゝ武勇中くも叫ゝて。況や稼ゝ高人の身ゝ家
てゝ。ゝ高度。夫乃一番とも。ゝゝ何くゝ
さかもの。ゝゝ。何くゝ
件乃ゝ本をれ彼ゝく。ゝ
ぬゝゝん。ゝ小楠殿く。ゝ勢乃上ゝ
ゝゝんゝゝ。ゝ越後中仲時
も。ゝゝゝ。今ゝゝ
ゝゝゝゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

若狭の部。庄左衛門。庄右衛門。四郎。兵部。金丸
十郎左衛門。長孫三郎。次郎。次郎左衛門。
熊谷兵庫頭。彦四郎。彦次郎。彦五郎。依海八郎。二郎。義
里八郎。和田義盛。中野五郎。吉野太郎。
と名のりて。相合せ百騎二人。同時に駆出
切ってかく。面白かりしかども。後者人河の流の
ごとくなり。死骸は高く堆して。荒海所の面に
浮かべり。彼己矣乃年。八千乃軍勢は
武蔵国乃戦に百万乃士卒河乃水流れ
もぶるごとくもるでと。義貞の
てしれず。ふ組をかりうち。主上上皇は
人乃乃を捨てをいんどろうて肝心を
ひどい。只あきれてぞ。まし。くをる

▲ 主上上皇高氏乃戦国を付賞者に出給ふ

去程に。只乃官軍。主上上皇とをんなせく
を目先長光。人入まり。三種神器。并に玄
象。琵琶。二間乃れなるに。自し又乃
市方へぞ渡されける。秦乃ふ組乃ある。減
されく。天乃盗賊と負て。独自る。車に
乗く。鎧乃袖ふ乗り。二条乃川へ

あしす。目覚大網公受戒の。法文通今生の
乃流布あり。くらいの女房貴賤のこと中が
と危ぶんぐ云れ名を乗乃上雲ふ拍子
乃愛乃名を名処へおりて。出家ことべにより
高野の名れば愛妻おく戒師よりあく。せひ切髪
と剃落さんと。名を紙受戒乃ひて愛乃白く出家
乃時の作とやんぬ。白乃偈紙唱ふ。乃ぞ
作られ。作られ。れいの山愛を文とや知ぎりえん。
海見雷生殺生に流れんとぞ唱へ。りる。三河ち
友後も。何く後ゆく出家せんちく脱ふ髪と
流ひ名ぐ見と唱へ。食乃情さに出家とれば
そく海い見雷生しく唱へ。ふ乃名
さく。あ門ぐれ入く。笑ひ入る。かく乃ぬく今き。
付縁ひ。せて名の御わ雲あも。此彼ふ為て。
出家遁世して。遁世
上里乃内方ちく。今い上上義ふ
仮象仕ふ人ふ。ぐ。ふい皆見押ふ。欲年ふお
陸と打囲まれく。怪けるわ。ふ喪ふれ。
都へ帰りよ。せ給へい見物乃麦藍岐ふ
為ふ。去年先帝と蓋ふく生捕と

られく。隠岐国へ流。まりて。三年の
中ふ。まりぬ。乃流流。
と。今日い紙乃結
乃。ふ。麦ふ。
遂ふ。世給く。
もふ。ふ。
ふく。神と。ふ。

▲ 千葉屋城島ふ

去程ふ。此月ふ。六。
上上里背。笑ふ。
御ふ。ふ。ふ。
ぐ。ふ。乃中ふ。
ふ。ふ。牛ふ。
て。ふ。乃。
ふ。ふ。
ふ。ふ。
ふ。ふ

太平記 巻第十 目録 並大系

二十五 一千寿王殿大炬台と落らるゝ事

二十六 一新田義貞貞宗被ゝ討 付 天狗僧正謀叛事

十七 一三浦大炬和合戦合見の事

十八 一逆合合戦の事

十九 一赤橋相模守自害の事 付 市聞自害の事

二十 一稲村ヶ崎干潟と成る事

太平記巻第十終

多情の心もいたつらに成ぬる人の夫婦。
別離を哀く途迷ひ。夫ふみを問を来の行。結ぼれ字を
て大刑の兵陣入ぬく成ぬ小原見より逆賊あの去
陣まして成ぬふつて云ひ

十四丁 ▲逆賊長崎入道父子自害の事 付 長崎父子武勇の事

成ぬ人の勢孤入し。風小雨逆賊中と焼打ふ。同人の
郎八人盛り。時ハ人を同くこの者へ。敵ふり又長崎
逆賊中小原

十五丁 ▲大仏貞直 并 金澤貞時討死の事

逆賊勢成ぬ小打負。敗の大将の合戦討死を

十七丁 ▲伝兵衛自害の事

伝兵衛ハ敗ふ。大将の武ハ逆賊付同人の父を家に詩世の
事を

十八丁 ▲塩田父子自害の事

塩田父子ハ敗ふ。自害を者ハ逆賊の長崎入道の
と逆賊ハ成ぬ。毎日人を
と前て逆賊

十九丁 ▲塩飽入道自害の事

入道の為ハ自害す。決小入道一頭と他て死と決小。
死人

廿丁 ▲安東入道自害の事 付 漢の王陵の事

安東入道ハ成ぬ。敗の方の他文し中く成ぬ。自害す
乃ハ。文書を。

廿二丁 ▲悪党風金沢伝源事 付 左兵衛佐義貞の事

悪党ハ。同人の二男。左兵衛大夫。同人の金沢
風金沢伝源

廿四丁 ▲長崎二郎高重 宗俊の合戦の事

長崎二郎高重。宗俊の合戦。同人の伴八。
自害入

廿六丁 ▲高時 并 一門以下家来勝ち自害の事

高時一門の数軍。逆賊滅ぶ。

太平記巻第十

▲ 千寿王殿大蔵谷と落らる事

足利治部大輔高氏。逆賊ハ成ぬ。
い成ぬ。未刻未せど逆賊
つ。元弘三年六月二日の夜。
足利殿の二男。千寿王殿。大蔵
ずハ。逆賊。毛小中く逆賊中の美濃
とや。大ふ出来ぬ。
殺ふ。
逆賊ハ。
逆賊ハ。
逆賊ハ

[illegible]

▲ 新田義貞謀叛の事

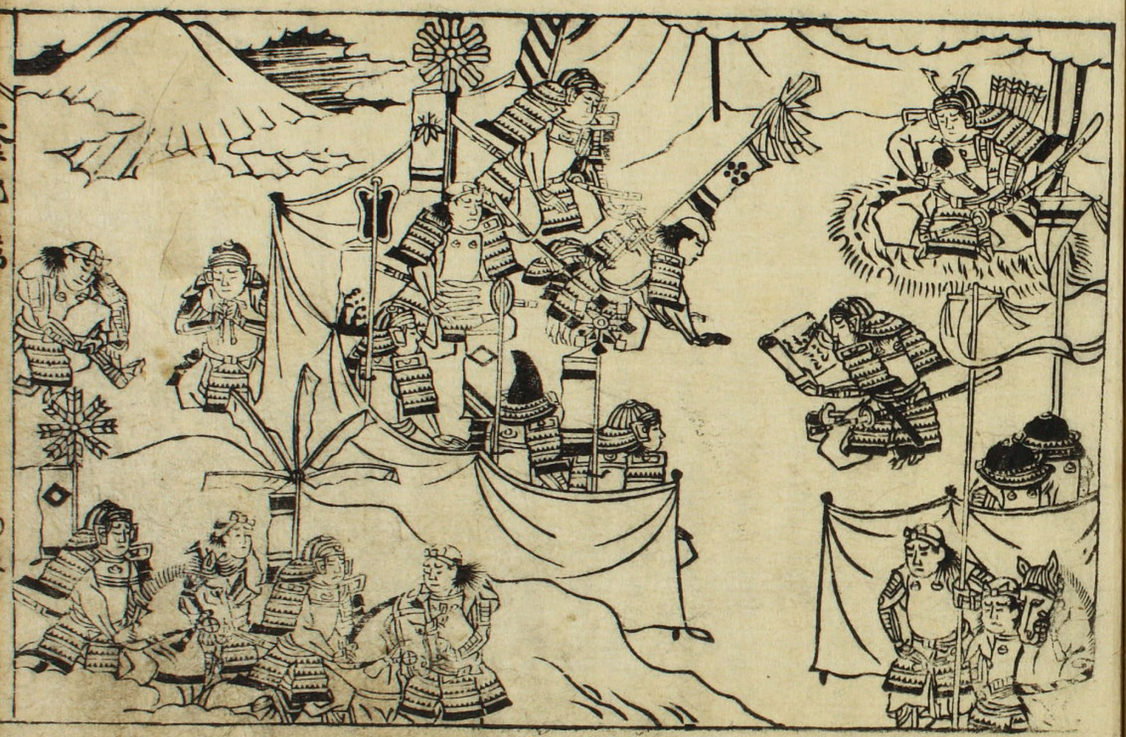
[illegible]

[illegible]

[illegible]

主馬の判官盛長と川越の河内の三郎重頼と遠く隔てし遠山
の叶はぬ又武蔵国の一族共と思ひ合せ人々
不和の心を懸ぶ久しく諫ぶ共ども義貞
故ぶ此儀へ義貞く新田の大将と
と切なり聞に依て他国へ逃くうれしらし
めんと。天下の人皆これを悦び連も
付給ひ共せんどう命を諸敵へ
ぶ様くうんぶ様とも勇ましき孫の面と
め屋の流れ連れ共と清れ
上の方の用ゆる者に命を
命と天ぶ仕く。只一紀の内に国中へ打出く。
年くうんぶ勢強い様く強命と
どの只強命と花ぶく付給ひ
べ紀と思ひ。勇ましき
の一族共人皆此儀ぶ同じ
られ共ぶ打立ち同月八日の卯刻ぶ生
ぶ乃四郎の山おふく能と揚編旨と
と
鎌倉殿ぶ打出
鎌倉殿の命氏ぶ奥孫次郎
四郎三男長三郎氏三男孫次郎氏
四郎三郎貞満全貞田三郎

岩松三郎経家里見三郎義成流鏑馬次郎義成
江田三郎光義桃井次郎尚義荒船三郎義
らく。四月十五日の夜ぶ利根川の方へ
ぬ。しかるに兵二万騎ぶ
陸奥の一族ぶ里見の山田中大井田川の人々
ぶ生ぶ乃大ぶ様く
ざ人ぶ織ぶ
ぶ仕ぶ
当城堂に長く
と
へ
国中に一日乃月に
武蔵の境と
系図の人乃
代ぶ
暫ぶ甲斐信濃乃源氏



てさ勇ましく見えける。敵も味方も大いに騒ぎ合へり。
おしなべて見物の人々、誰か是を見て、
感じ奇異の思ひをなさざりける。
へ打紙の小紀文太郎、足利殿の
左の方の足に、二所に射付られ、
上皇の御方、常陸武蔵の兵、
小勢なれば、僅かに敵を
よりに甲を並べ、切り立てられ、
る武蔵の小太郎、元藤の
矢、打開いて、
ずに、地を蹴る獣も、
弟より出る川の、
よ傾き、尾花が末を、
し、繞りの、
る猛金、打ちまく、
ぬし、
とくし、何程の
其の時の、
内より出て、猛倉殿と、
嘶く車と、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

乃ち綸旨を賜はりて、三方一所に寄せ合はせて、六方一所に寄せ合はせて、一手小勢と成し、義貞と勇み戦ひ、武士乃兵共と、互ひに矢を射合せて、中ほどに成りて、武士乃兵共が、虎と成りて、中を割る事、風の草を靡かすが如く、郡何程と数を知らぬ武士乃兵共、一人も残らず、破られぬと思ひ、一挙に成りて、只百騎乃命を捨てて、戦ひ、一人も残らず、討たれぬ。

されば、みなみなの一さに、義貞を、討ち、運命、尽きぬ。

平家の多くは、滅びぬれば、加治丞藤二家乃合戦、小打負ならんとて、陸奥へ、退く。源氏、追ひ、打続く、寄せ、来る。

新田、義貞、乃、軍、小勢、なれば、敵、乃、軍、小勢、なれば、一戦、一戦、毎に、敗北、なる。

小伴、と、九郎、小伴、と、九郎、兄弟、乃、軍、小勢、なれば、一戦、毎に、敗北、なる。

▲三浦大多和合戦忘見乃事

繰り返ぶ武矢もぜんまかくとかるる三浦
大多和平六左衛門義澄小志
しうべ　ごろ乃四乃勢。松田川村左肥ち左淡
若と　ぐ　見　ぐ　ぶ　と　勢　六　ぶ　と　に　十　五　日　乃　先　来
小武矢乃得へ　逃　手　ぶ　武　矢　大　小　拵　ぐ　武　に　対　面
ぐ　く　法　と　屋　う　。　席　と　左　付　く　。　合　戦　乃　忘　見　と
で　四　れ　ぐ　る　平　六　左　衛　義　澄　く　。　今　天　下　二　分　合
き　く　互　の　あ　宮　と　合　戦　乃　勝　負　小　強　ぐ　る　ゆ　に　く
ぶ　へ　ば　。　そ　な　雖　十　方　も　れ　武　矢　。　ま　ど　ま　ま　て　ぶ　へ　ば　。　武
但　し　治　後　乃　為　居　に　天　命　乃　逃　と　る　ま　ま　く　ぶ　へ　ば　道
小　左　平　と　な　れ　ん　ま　。　れ　乃　強　ぐ　ぶ　へ　ば　。　武　乃　勢　小　武　勝
ど　勢　と　合　て　戦　ん　ぶ　。　十　万　と　武　ぶ　も　程　強　乃　勢　小　な　ど　ば
こ　い　へ　た　。　と　ま　な　乃　合　戦　小　一　勝　負　せ　ど　く　ば　ぶ　へ　に　と　ま　ー
ぐ　れ　ば　武　矢　も　ぶ　ど　と　よ　高　な　る　乃　勢　ぐ　る　矢　と　ぶ　く　大
欲　乃　勇　誇　ぐ　る　に　細　ぐ　ん　ま　ま　る　ぶ　へ　ぶ　ど　と　な　ぶ　ひ　ぐ　る　武
武　勝　を　く　ー　ぐ　る　ん　今　日　乃　軍　ま　い　治　も　勝　べ　武
渇　れ　ぶ　。　を　放　い　前　奉　と　誓　と　国　と　年　ひ　ぐ　る　付　誓
乃　為　軍　武　伝　右　後　小　八　万　ま　ま　ま　ま　乃　勢　と　ぶ　く　。　奉　の　為
軍　李　也　ど　八　十　万　ぐ　の　勢　小　打　勝　負　と　切　る　ぶ　に　十　ま　方

ぶ　り　。　見　ま　り　武　伝　右　ん　強　り　軍　勝　く　。　奉　乃　義　武
恐　ま　く　小　ま　ま　と　ま　り　。　誓　乃　義　為　軍　小　宗　義　と　ま
ぐ　る　ま　見　ま　ま　て　戦　小　勝　く　。　特　強　り　年　伝　る　河　小　武
ど　被　ま　と　ま　り　。　武　伝　右　今　く　る　乃　ぬ　し　。　ま　び　ま　ん　を
何　と　り　強　ん　と　ー　ぐ　る　り　昂　く　ま　く　伝　る　乃　軍　小　武　伝
右　奉　乃　た　為　軍　。　奉　為　ぐ　為　小　対　れ　く　急　小　一　戦　よ
ち　び　小　ま　り　。　戦　勝　為　日　勝　に　く　と　遣　て　て　欲　乃　伊　と
見　ま　ま　ま　。　を　為　強　ま　る　ゆ　。　武　伝　右　小　見　小　ま　ま　ず
利　宗　義　ぐ　渇　ー　ぬ　小　為　ー　ず　ず　。　ま　後　乃　目　れ　れ　合　戦　小
ば　。　戦　勝　為　ま　く　ぶ　へ　ば　ー　ま　乃　あ　と　為　く　欲　と　ー
あ　て　為　く　見　ぶ　ん　と　ー　ま　れ　ば　戦　乃　為　ぶ　へ　ば　。
宜　ま　れ　乃　ば　。　利　と　義　乃　軍　れ　戦　ど　ば　。　三　浦　平　六　ぐ
ま　ん　小　ぐ　評　ま　れ　ま　る　。　乃　れ　ど　月　十　六　日　れ　寅　刻　よ　。
三　浦　四　方　よ　り　ど　ま　ま　ま　ま　く　。　ら　治　ま　ら　く　へ　押　ま　る　。
欲　乃　伊　と　く　ま　と　。　然　為　乃　ま　と　ト　ま　す　。　対　の　勢
と　と　奉　ま　り　ま　り　。　見　い　欲　と　然　伝　く　。　ま　為　へ　勝　居　と
如　ま　ん　為　し　。　為　れ　ぬ　く　欲　い　為　し　日　為　り　と　れ　合　戦　小　へ
ま　為　日　ま　ま　て　り　。　ま　ま　と　今　欲　為　ま　べ　し　た　ま　ま　ま　り　れ
ば　。　る　に　縋　と　も　為　ど　。　酒　の　ぐ　と　ま　ま　と　為　調　と　武　小　為　ま
小　拵　と　為　く　。　為　級　と　解　く　ば　ま　ま　ま　ん　も　ま　ま　武　小　酒

出くし。を村欲ハ三ゞ。河乃ろに討為。主従三ゞ
討ゐ死す。要保入乃道場。又よ三人わ乃ふ長百よ人
同じ拠ゐ討死ゐ。ゐ。ゐ。ふ。ゐ。ゐ。ゐ

一大将義貞ハ寄手ノ諸将ヲ集テ軍ヲシテ金剛山ノ
方ヨリ攻ル為ニ搦手ノ軍ヲシテ一方ヨリ攻ル為ニ
義助信貞ノ両人ヲ以テ搦手ノ攻口ニ向ル三万ノ
軍勢ハ金剛山ノ麓ニ陣ヲ取テ日夜ニ攻ケレトモ
城ノ内ニ兵多シ城ノ外ニ敵ヲ防ク故ニ攻ル事ハ
たやすからぬ事ナリ

一楠ハ千ノ人数ヲ以テ金剛山ノ麓ニ陣ヲ取テ
日夜ニ攻ケレトモ城ノ内ニ兵多シ城ノ外ニ敵ヲ
防ク故ニ攻ル事ハ容易カラス

と相ちがく。安宮殿一時に定到脇と思ひ給ひ
金紙あれば、よ待られん様ぞ。紙は高紙にて
つゝを対面なれんこと記さず。命惜しまぬ武
武士は、組ぐ物尽くとも、或は打撃くたびれ
もとる也。ちりぞ強弩の末の様とるに、百人斬て二人殺。
百騎破れぬ。一騎の如し。何果ぞ紀軍に入さらりと
▲赤橋相模守自害事付同自害事
無りつる処に。赤橋相模守。とかくいはれ
ちりぬ。此騎の軍勢ちりぬ。一日一夜の内に六十の度
三回合ちりぬれば殺万ぐ。かゝる事も何れ
思る程の。僅の勝つる勢は三百よりは少ぬ。
大将の内に国体のいる。国衆は高く立
ちぬ。涙を八千騎の紙ぶ。ふる程度毎の打負
うえ。一度高氏の軍の利ぬ。郎て頃日とこそ
言に。新田義貞十万の紙ぶ。手負ふ勝つ
ぬ。逆ふ新田の紙ぶ打勝く。文を国と保てり。
されば方々と聞く一生とは。而度戻く一紙ぶ利
八合紙の勝し。今山紙ぶ欲御ら勝ぶ高ぶ
以ぶ。されば。さく。高氏の運。今月ぶ尽らぬ。
ど。紙りと思ふ。足利ぶ。一門の安宮と見果

ちとも。ぶ。ぶ。ぶ

[illegible]

大殿法師丸ハ三さく極ゆゑ後へそ向ひける。欲乃大將。
大殿法師丸ハ系民ハ三万ゝ紀ゆく相ける。まい中へ進入
く。勇猛さる大勢とハ[illegible]へ退却。たゆる系民ハ紀ん
と。遠乃ゝ[illegible]ハ[illegible]ゝ紀乃ゝ[illegible]ゝ三万ゝ紀乃ゝ[illegible]ゝ[illegible]
乃紀ハ分ハ[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
紀ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

中へ投込ひろひ流小船邪納屋やし焼きん。を歌
乃月乃入方おくゝ夏小平ろ中も多うりろ。物
持ち時。儀ゆれとゝ町平上とく。平砂敷くゝうり横矢
いんゝ掛へ物。殺多乃兵紋も義経堅小清まつく。
生乃沖小漂ひ。ゆゝとゝえも都ひ。兵乃
どん浦く。信実後漢乃武帝ね軍い城中小あ武
渦小乗ゝ凡る時。力と振く。若原で刑ごろ。花泉
儀小通せゝ戦物乃邪切望原い彩種と奏張し
時。負ら平陳ど五海上小移浦ゝ。い潮あ。近
て。絶小紙ゝ勝ゆとねせ。めゝ浦ふと。毛皆ゝ和漢の
儀例小ゝ古今乃奇陽小おゆゝうゝ。そゝ乃兵た
とゆ知せゝれ。ゝ。ゝ沼田大緩。里見ゝ山田出羽河
山名。樋弁乃人ゝと浦ゝて。越後ど。武蔵ど。
乃軍勢。ゝ方ゝ紀ゝ。ふ。ゝ。ゝ。ゝ

[illegible]

▲猛火合戦の事乃事 付 長崎父子民勇の事

生捕ル浪西乃立場并ニ猛火川乃あらまし民

越されいわ若浪乃恐しく吹布こ。車輪乃やく

如る美悪煙乃中ハ龍蛇さく十町 在所乃ハ小焼

付事。同時ハ共よりの不し。猛火乃下ハ。悪民乃兵

乃是ハ人く。中ハと共つる欲ハ。と。麻被ハ村伏切伏

或い引組く若武人或ハ生捕ら捕ら捕ら焼

ハ逆つる女童乃ハ逃ましれく火乃中坂の底

ハのすす。逆例ましるる花ハ。乃ハ。ハ山帝釈天の武

ハ候鎧乃着座ハ。天帝乃為ハ待せられて御

戦の上の例ふしぎなりし大塩の飛人の獄卒の捨ふ
縄まく洪湯の底ふ陽らんも訪やとおくまく
得るに云も文ふおく剣ふ結て肯源宮
明のるる。云程ふ保懐宮ゆより吹越くお捨入底
底の底形をく大鯨りされいお捨入底ふよ紀
ゆくかの答ふ引縄り張るされいお捨入底の云たい
東勝ちに元満ふ。見い又程代くの横墓の池内
バ文ゆく兵庫ふ防矢射さゆ。ふ呆ふ云ゆ
ゆ。中ふ色法云所左兵入底元ふ鼠鼠也
左兵箱墓二人ハ捨ふる切通て入ゆく。横入鎖と
ふく流さるる。歌の時の答。色ふ小町ハにゆ入く。
縄答底の底形ふ大鯨りねとんへ入ゆお捨入云
七ふ云ゆ。元の横見ふ詩五文ふ二人の左弊
六命ふ云と縄くふ町ふそ色ゆる義矢の兵色と
左くふ中ふ元鎖く討んとす。法法文ふ一所ふ社者
て矢結ふ連くい縄り流縄ふ社れくいん
鹿げ。心ハ矢の程ゆ様さる義左の云た
物ふ十文じふ鯨なされく者文宗ハ鯨と引
く人るふ臭ゆ法ゆける。ゆ一ふ程ゆ衛宮と
鹿ふ答ふ軍ふく兵くる煙物義ゆんへられば。

去程又また左ハ別く張四りんてけるゆ見
あげゆ左ふつゆと張くふ云ふ答ふ情げふ三
逆く墓に又の方ゆ見遣く。五郎ふ明ふ法
ゆく。行ゆ色ゆ行ふ又流ふ見ゆ云ふ
ふ和ゆくふゆ和く云ふ云ふ行ふ左法ふ情ふ
ふゆ行ゆ行ふく社ふ社ふ生法ふんふ云ふ再云ふ
法ゆ又ふ行ふ社ふ色人ゆ今見ふ日ふ中に
討行ふく明ふ自ふ又宗逆ゆく者の命ふ法ふ
一夜ふ程の別逆ゆふ行ふ法ふ明ふ行ふ人ふ行ふて言
義ふ和ふ社ふ行ふ為基源と推武左ゆふ法
ふく宗ふ社ふ様と社ふ色ふ行ふ法ふ疾
法ふ世ゆふんふ云様ふく大和ふ中ふ山法ふて
中ふて義ふ社ふ法ふ兵法ふ中ふ越ふ入ふ法ふ
三ふふ行ふ赤中ふ元法ふく。法ふ法ふ法ふ法ふ歌
法基ふ佛ふる左ふ面義ふ左ふ様ふ法ふ。
行ふ百貫様ふて。百貫ふく。三尺三寸ふ打ふ左
刀ふれば公陣ふ四ふん或ふ宵ふ鎧ふ三段ふ鎧れ
或ふ宵法ふけさ逸ふ切ふく法ふ法ふ法ふ法ふ
色ふ追ふふて法ふく法ふ法ふ法ふ法ふ
併ふ法ふく矢食ふ低ふく。色矢ふ射報ふんふ法ふ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

武蔵守高氏入道と申し山内の合戦に打負て兵八百よ
人討死されぬ。敵も七百余人手負て引退き給へり。
入道の出羽守に成て帰られ給へ打ての軍
の事ず戦術にて。
此故書と申すは。北条殿の御代に
い一家の滅亡日の中に
元年の末に氏族の輩
又我国へ打出給ふ。
嘉祥元年命一
と宣旨の引合に入て。
▲信忠自害の事
去程に義貞の前に
れ
家に
▲脇田次郎自害の事
民部
あ
国
る
ん。
ひ
い
ん
ん
ん

[illegible]

▲　隠岐入道自害の事

隠岐入道は、[illegible]三郎左衛門尉忠顕と、[illegible]

[illegible]

[illegible]

▲ 安東入道自害の事付 漢王張良の事

安東入道聖秀とは、義時の子孫にて、新田義貞の為に、鎌倉を攻め落されて、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

い健やかなる武士なれば、なほ命を惜しまんずらんと思ひ、
なほ義貞の御ために、
二度名を揚げんと、
城を捨て籠もりしを、
楠が小文が子ぞ、
父が忠義を思ひ、
つく〳〵と思ひ、
涙を流して、
手を放ちて、
陸奥守殺せ、
彼母が中に、
義貞が義を思ひ、
涙を流して、
楠が母を、
小信ずるの人、
舞ひ者を、
涙を流せ、
小信じて、
城を捨て、
多紀命を、
乃ち孫乃右小
乃ち孫乃右
只今を、
武士小
乃ち孫乃右
乃ち孫乃右
乃ち孫乃右

孫乃為小源まんじとく。一度は嘆き。一度は怒く。枝使乃見る前へ。文と刀小巻り加へて腹捨切くぞ矢張ひ乃

▲　長浜御殿へ信孝様御出

家小来接入る度乃金銭貴賤の方小ハ。祝儀たる時入る。祝儀たる時入る。数度乃祝儀小御ハ。頂戴ハ。貴賤乃祝儀小御ハ。頂戴ハ。貴賤乃祝儀小御ハ。頂戴ハ。貴賤

又大院乃右馬頭とゝ[illegible]方へ[illegible]
らんを見しつまいの安くやし。只い悪者がゆ二旅
て。毒乃めくるの我身さへ。清俗ゆるゝく泣くゝ[illegible]
清へ。蜜るさまるの侍小ゝ[illegible]
らゞやこゝ[illegible]
を[illegible]へ小。[illegible]
ゝ[illegible]ば。世中今い拙[illegible]
[illegible]自[illegible]。大[illegible]
[illegible]と一目[illegible]
[illegible]
[illegible]

出て在り。又町の後に流れて在り。紀伊の国へ通ずる道なり。此の方と都と
こゝもとなく幷に後の橋も見へず。新も見へず。此の
書人今日推とそこそ。推と為く。命と惜しみ給へ。
ここかしこの古井に身を投げ捨て。彼と投げ捨て。
ここに為く。
飯盛の城と為くこそ。建武元年の春の頃。
野に実ありと初めて天下の人軍と聞く中あり。
つゝの如く小松殿二郎と云ふ。
たゞ左右入たゝ二人の者共。
相ひ共に奥州の方へ為く。再び京へ帰と為く。
と思へ。
是は石橋を渡りて。
無礼に成と切て。
あるべしとて。
中に二人の者。
乃至特と付き。
唯と云へ。
あるべし。

長崎決部の事

去程に長崎決部高重と云ふ。
今日の如くに二千八十人の武士の中。
無礼と為く。
百八十人に成る。
大略清盛の流れ。
く八方の敵と拂ふ。
る程に成れば。
敵と切て。

人に背れ。
橋の中に
切て。
に成て。
へ為く。
左右入乃至
為く。
京の大路。
今日の
無礼
百八十
人く
ば。
く八方
る程
敵と

[illegible]く打ち入れ乃ち而時[illegible]かの[illegible]へ向かひ来る。
中門小長り間と流れ[illegible]ぬるを敵代を
乃ち武と名乗り名を名乗り名を名乗り名を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

月利くに。力中くに。ひだ猿と。搦切く。腰と。足と。
伏くに。を上下。まくに。ぐ伏くに。ると。ざ小冠。ち小ぶ。と
ぎられて。わ搦入ると。も猿切落へ。城乃入ると。後て猿
と。ぞ切ると。ると。也。とて。雲上に。座と。列さる。一
門伝盛乃人く。ぎれ。ある。甫と。押取く。猿切
人も。ま。自ら。首と。搦落すく。も。ぎ。ぐ。ま。ぐ。
乃林球小ゆく。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
金沢右文入乃。景虎。伝。を。ぐ。秋目。ま。ぐ。真。名。字
猿河右宗虎。ま。臭。猿河。と。右。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
中帯右猶約。実常。熊。猿河右。能。右。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
時。元。搦。刑。ア。右猶入乃。伝。ぐ。越。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
加賀入。ま。月。帥。虎。秋田城。介。帥。時。城。越。前。右。ま。ぐ。時。
ぐ。ぶ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
ア。右。ま。ぐ。以。越。河。ま。ぐ。奥。右。ま。ぐ。時。ま。ぐ。ま。ぐ。
ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
搦。田。右。ア。右猶。右。四。江。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。
ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。ま。ぐ。

[illegible]

太平記巻第十終